

気候変動と公衆衛生

文 内藤 克彦
text by Kazuhiko Naito

環 境省の報告（地球温暖化と感染症）によると、地球温暖化が進むと、「①感染症を媒介する蚊類の世代数増加により、居住環境における蚊の個体数も増加し、蚊の生息密度が高まる可能性②卵、幼虫、成虫などで越冬する蚊の冬季死亡率の低下が翌年の個体数増加に関わる可能性③都市部の雨水マスは冬期に結氷しなくなり、蚊が幼虫で越冬」などにより、感染症のリスクが高まること指摘されている。

この他に、汚染された水が原因で生じる下痢などの「水媒介性感染症」は、温度、湿度、降水、水源の汚染状況など複数の要因が関連していることが指摘され、気温などの気象要因とも強く関連しており、温暖化は水媒介性感染症の発生をさらに増大させると予測されている。このようなリスクが大きくなるかどうかは、国全体の文化としての公衆衛生環境にも影響されよう。

一般に日本の公衆衛生環境は歴史的にかなり優れていたようで、幕末・明治初年に来日した欧米人も驚きをもって指摘している。1877年に来日した米国の動物学者モースは、まだ江戸時代の生活が続いていた明治初期の日本について『日本その日その日』にこう記録を残している。「東京の死亡率が

ボストンよりも少ないということ知って驚いた私は、この国の保健状態について多少の研究をした。それによると赤痢及び小児コレラは全くなく、マリアによる熱病はその例を見ることは多くはない。……しかし、我が国（米国）で悪い排水や不完全な便所その他に起因するとされている種類の病気は、日本にはないか、あっても非常に希らしい」「猩紅熱※はほとんどなく、流行することは断じてない。ジフテリアも極めて希で、これも流行にならぬ。赤痢か慢性の下痢とかいうような重い腸の病気は非常に少なく、肺結核は我が国（米国）の中部地方におけるよりも多くはない」とある。ペリン教授の『鉄砲を捨てた日本人』によると、「東京の死亡率がボストンより低いだけではなく、ニューヨークよりも低く、ニューヨークではチフスが流行するのに東京ではチフスは全くない。モースがその原因を調べたところ、日本人は保健・衛生の面で遙かに進んでいることが分かったのである」とある。さらに時代を遡り、家康の時代に日本に来たスペイン貴族ビベロも「疫病を知らず、また、その話を聞きたることなし。……家は甚だ清潔にして、市街に至るまで大いに清潔にす」と述べており、この点は宣

教師の報告にも同様な指摘がある。

つまり、明治政府は欧米のことばかり見ていたが、欧米人は日本文化の公衆衛生面を高く評価していたわけである。気候変動により公衆衛生リスクが高まる恐れがある今日、「（欧米人は）徐々に次のようなことに気が付き始める。日本人にすべてを教える気ではないのであるが、驚くことには、……家庭の整理、周囲の清潔、自然及びすべての自然物に対する愛、……これらは恵まれた階級の人々ばかりでなく、最も貧しい人々も持っている特質である」というモースの指摘は重要であろう。日本の公衆衛生文化も気候変動対策の鍵の一つかもしれない。

※現在の溶連菌感染症

Profile

1953年12月生まれ、400年前からの江戸っ子家系だが、中学までは群馬県育ち。東京大学大学院（物理工学）修了後、環境庁に入庁。温暖化対策課調整官、環境影響審査室長、自動車環境対策課長、港区副区長を経て退官。京都大学特任教授を経て、現在、日本トラッキング協会理事長、東北大学大学院環境科学科特任教授、慶應義塾大学訪問研究員。エネルギー・環境分野が専門。

